

土方巽舞踊試論

一消える構造・その2〈型〉と 〈型の成立条件〉一

三上賀代

研究目的・方法

暗黒舞踏の創始者・土方巽は言語によって振り付ける。土方の振りは弟子たちの‘稽古ノート’に土方の語彙集として記録された。

本研究は、土方舞踏技法体系化完結の翌年、1977年から1981年の5年間の、筆者を含む3人の弟子たちの‘稽古ノート’から土方の振り一^①〈型〉の名称と、〈型の成立条件〉を規定する言語を抽出、分類、整理することによって、土方のイメージの傾向と、踊りの構造を明らかにすることを目的とする。

結果及び考察

(1) “なる”表現技法

土方は、舞踏の根本理念を、^②「あらゆるものにメタモルフォーズする肉体の獲得による人間概念の拡張」にあるとした。これは、^③60年代後半から70年代にかけて“なる”肉体、つまり、‘牛’や‘鶏’に“なる”表現技法の探究として進められた。

(2) 〈型〉の名称分類

弟子が“なる”ために、土方によって振り付けられたのが〈型〉である。

この〈型〉の名称は、資料中に^④400余あり、動物、植物、人間、現象等に分類される。さらに各々の項目が、空のもの、陸のもの、水のもの、草木花、男女、年令、役割、人の名前を冠したもの、身体部位を示すもの、宗教、自然現象等に細かく分けられる。

●〈型〉の名称に冠された美術家

〈型〉の名称中最多数である美術家の名前を冠した〈型〉に冠された美術家は、全て^⑤西欧近代画家。それもゴヤを筆頭とするロマン派の画家たちが多く、重複しながら、シュールレアリスムを含む幻想の画家、及び、世紀末の画家たちである。

土方が文学に作品の題材を得ていたことは既に知られているが、実際に動きを創る時点では、視覚芸術である絵画を、そのイメージの源泉としていたことが理解される。さらに、^⑥美醜を超えた人間の内面の探究、想像力による魂の解放を目指した画家たちに、内容、手法とも土方との共通項を探ることも可能であろう。

●2番目に多い〈型〉として‘空のもの’

また、〈型〉の名称の中で2番目に多いのが、‘空のもの’つまり鳥である。土方舞踏が一般的に地を這う、いざるといった大地との関係におい

て考察されることが多い中で、土方が鳥を志向したことは考慮すべきである。そして、鳥の中でも、‘孔雀’の〈型〉が最多であるのは、土方が‘孔雀’の変幻性あるいは聖性に注目したものと推察できる。

●負の視線

〈型〉の中で‘狂人’‘病人’‘めくら’などが特徴的に見られるのは、暗黒舞踏の暗黒が^⑦「歴史の裏面にあるもの」であるという指摘に呼応するものである。

この土方の負の側からの視線は‘ガイコツ’‘幽霊’など、死を視覚的に描く〈型〉が多いことにも示される。また、‘仏’‘菩薩’など宗教に関する〈型〉が多いことも、土方の、負の側からの生の認識法に基づくものであると考えられる。

●その他の〈型〉の名称分類

これらの〈型〉の名称は、例えば‘果樹園’など〈型〉そのものから風景、情景を連想させるもの、また、‘ハス空間’など空間そのものを指すもの、‘金属の花’など材質を付加した〈型〉、‘ゴリラハス’など異物の合体したものなどの分類も可能である。

(3) 〈型の成立条件〉

各々の〈型〉には、その〈型の成立条件〉が規定されている。例えば‘牛’には

- 背中の上の字
- 腰の羽
- 左脇のボボボー
- 頭にグリア一頭が下がる
- 背中に小人が走る
- 左足のバッタ

という〈成立条件〉が示されている。

これらの言語は、土方が弟子の動きを導くために規定したものである。この‘牛’の例からも、土方が一般的な‘牛’の形態を模写したのではないことがわかる。^⑧「私の方法は徹底的な写実主義の手法をとっています」という土方の「写実主義」とは^⑨「本質直観がスパークする」あるいは^⑩「髪の毛1本だって本人のもの」とであるという土方の認識方法に基づく写実なのである。そして^⑪「観察に観察をして」、^⑫「そのものを存在せしめているもの」つまり、^⑬「必然性の現出」としてのかたちを、〈型の成立条件〉として規定したと考えられる。

●言語から動きへ

弟子は、これらの〈成立条件〉を示す言語群によって、動きへと導かれる。

ここで、〈型〉の名称である‘牛’という言語も、〈成立条件〉として示された‘Sの字’という言語も、土方と弟子に共有された記号となる。

土方が‘Sの字’‘ボボボー’などによって求めた動きは、‘牛’という言語によって、まず、

弟子にあるイメージを与え、さらに‘Sの字’‘ボボポー’などの言語によってイメージ、知覚されたものによって導かれた動きである。逆に言えばこの弟子の動きが、土方が最初に‘牛’という実体を見て描いた動きとなるために、土方は、‘Sの字’‘ボボポー’などの言語化をしたのである。

●言語への〈かかわり〉

そして、この具体的な動きを導く‘Sの字’‘ボボポー’などは、明確な動きの指示ではなく、各弟子個人に任されたイメージの認識のしかたと、そのイメージ〈かかわり〉方が問われてくるものである。

●〈成立条件〉の言語の働き

さらに、この動きを導く〈型の成立条件〉の言語群は‘Sの字’は曲線と方向を示し、‘ボボポー’は脇の下の感触や状態を示すものとして働くことがわかる。言語からイメージを描き、そのイメージに〈かかわり〉ことで、肉体に知覚を呼び、その知覚から動きが生まれるものと考えられる。

●〈型の成立条件〉の言語分類

〈型の成立条件〉である‘Sの字’などの言語が、‘牛’以外の〈型の成立条件〉に重複して使われていることから、土方の〈型〉において、動きを導くための〈成立条件〉の言語群に、ある約束があることを仮定することが可能である。この仮定の下に代表的なく型の〈成立条件〉の言語分類を試みると、例えば‘鉄のヘアバンド’によって頭の重さの知覚、‘貝がら’によって曲線、‘羽毛’によって軽さなどの知覚を呼び、知覚から動きを導くことが明らかになる。

また、‘すすけ’‘腐敗’‘衰微’などは土方独自の負の質感を示す言語であり、‘気化’‘煙化’‘無化’‘粒子化’‘拡散’‘分散’などの消えていく様相を示す語が土方舞踏の動きを導く言語として特徴的にみられる。

さらに、感覚に動きを直接訴える擬声語、擬態語が多いことも特筆される。

(4) まとめ・土方舞踏の動きの成り立ち

〈型の成立条件〉の言語分類によって明らかになる土方舞踏の動きの成り立ちは、以下のようにまとめられる。

土方の〈型〉を表出するための‘助け’となるイメージを導く言語群は、動詞、名詞、副詞、形容詞等に品詞分類され、各々の言語が、イメージ、方向、速度などを表わし得るものとして働く。さらに、これらの言語群は〈型〉を表出する総体のイメージを、風景、気配までも表わす動きを持つ。

また、その各々の言語には、土方固有のイメージが含まれるものが多く、そうした土方固有のイメージの総体として〈型〉が表出される。

さらに、土方の想起した〈型〉のイメージは、

⑭ 感覚要素を主なる手段として言語化することを特徴とする。すなわち、イメージを含む各々の言語は、主として五感によって知覚されたイメージによって、動きへと導びかれ、この動きは、肉体の状態の変容を主要なものとする。

そして、この肉体の状態の変容による空間の質感の変化を暗黒舞踏の大きな特徴とする。

●本気で〈かかわり〉ることによって“なる”

以上のような特徴を持つ言語群によって示された〈成立条件〉に、どこまでも〈かかわり〉ることによって、そのものに“なる”ことが可能となる。これらの〈成立条件〉に、どこまで“本気”で〈かかわり〉ことができるか。それは、もう〈かかわり〉ということさえも、土方の言う「溶けて」しまった地平での、一瞬のうちの〈かかわり〉方であり、一瞬のうちの姿である。

子供はいつも簡単に‘牛’に“なる”ことができる。それは子供の‘牛’に“なる”という‘想い’が‘牛’に“なら”しめるのである。土方は、子供の⑮「騙されやすい注意力」によって、何にでも“なる”ことができるということを方法化したのである。まず、あると信じていた自己などないのだという。⑯〈自己放棄〉によって、舞踏家の精神のあり方を示し、次に‘牛’に“なる”技法として、どこまでも‘牛’の〈成立条件〉に〈かかわり〉という〈神経回路〉を作ること、舞踏の基本的な方法としたと考えられる。

そのために⑰「メカニックに肉薄すべき技術」を、かくも細かく規定したのである。

そして、このように豊富な言語を呈示した土方が「踊り手は言葉を聞いてはだめです」と語るのは、踊り手が技術を越えて、一挙に突き抜ける地平を、土方が目指したからだと考えられる。

おわりに

今後、曖昧さを残す言語分類の規準を明確にしつつ、土方舞踏技法の考察を深めたい。

(注)

- ① 土方舞踏において最小単位の、意味を持つ動きを〈型〉とする。一般に使用される伝承形態としての〈型〉とは異なると考えられる。
- ② 合田成男「土方巽を悼む」朝日新聞1986.1.24
- ③ 比較的長いひと流れの動きを含むものから、ほとんどポーズに近いもの、また、ある〈型〉に別のfactorを付加したもので、同一の動きでないと考えられるものは全て抽出した。
- ④ 高階秀爾『近代絵画史』上下(中央公論社1975) 他参照
- ⑤ 坂崎乙郎『ロマン派芸術の世界』(講談社1975)
- ⑥ 郡司正勝編『日本舞踊辞典』(東京堂出版1977 p.21)
- ⑦ 色、香、音、温冷の感覚、圧覚、空間感覚(形や大きさの諸感覚)、時間感覚等を指す。エルンスト・マッハ『感覚の分析』(法政大学出版局1971)参照
- ⑧ 三上賀代「土方巽舞踏論・その1 基本概念としての〈自己放棄〉」『舞踊学』13号別冊 1990.10
- ⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮は土方語録、出典略